

# 石濱純太郎の“モンゴル学事始”

堤 一昭

本 OUFU ブックレット vol.10-1は、満洲国で発行されたモンゴル語新聞『フフ・トグ（青旗）』の1941年刊行分（創刊号～41号と号外）の全紙面を収める。うち16、41号は京都大学人文科学研究所所蔵、ほかはすべて大阪大学総合図書館の石濱文庫所蔵のものである。本ブックレットは OUFU ブックレット vol.7、vol.9<sup>1</sup>に引きつづき、石濱純太郎の収集したモンゴル語新聞コレクションの調査・研究としての性格も持つ。石濱文庫には、『フフ・トグ（青旗）』のほか、後述の『奉天蒙文報』をはじめとする20世紀初頭からのモンゴル語新聞も収められている<sup>2</sup>。

ところで、石濱純太郎（1888～1968年）は、これらのモンゴル語新聞をなぜ集めていたのか？そもそも「漢学畑」出身<sup>3</sup>の石濱が、いつ、どのようにモンゴル学にたずさわることになったのか。「はじめに」に代えて、石濱と内藤の年譜や業績目録、新聞記事などから、石濱純太郎の「モンゴル学事始」を簡単に跡づけてみたい。

石濱がモンゴル学に入るきっかけは、師と仰ぐことになる内藤湖南（虎次郎）との出会いにある。石濱が内藤湖南と出会ったのは、1915（大正4）年7月16日。大阪と京都の文会（漢詩文同好会）の第一回連合会においてであった<sup>4</sup>。石濱は東京帝大の支那文学科を卒業後、前年に大阪の文会「景社」に参加、すでに漢学の素養を活かした研究のほか、中央アジアの学術調査の成果に関心を持ち始めてはいた。内藤との出会いの翌1916年からさっそく、石濱はモンゴル学の研究成果を著しはじめる。「元朝秘史蒙文札記」を3回にわたり

---

<sup>1</sup> ①『戦前期モンゴル語新聞『フフ・トグ（青旗）』のデジタル化と公開の可能性—東洋文庫政治史資料研究班・研究セミナーの記録—』（OUFU ブックレット vol.7、2015.3）、②『戦前期モンゴル語新聞『フフ・トグ（青旗）』データベースの構築・公開に向けて』（同上 vol.9、2016.3）

<sup>2</sup> 内田孝「内モンゴル近現代文学研究からみた『フフ・トグ』紙—モンゴル語定期刊行物の研究状況に言及しつつ—」注1①文献、pp.40-41、p.56注(7)。

<sup>3</sup> 1897（明治30）年、石濱は十歳になる年に大阪の漢学塾・泊園書院に入門した。姉のかつが四代院主・藤澤章次郎に嫁いだこともあり、後にはその運営にもたずさわることになる。1911（明治44）年、東京帝大・支那文学科での石濱の卒業論文は漢文で書いた「歐陽脩研究」であった。この卒論の原稿が石濱文庫に存する。

<sup>4</sup> 石濱先生古稀記念会編「石濱純太郎先生著作目録」「石濱純太郎先生年譜略」『石濱先生古稀記念東洋学論叢』石濱先生古稀記念会、1958年。

連載、続く「蒙古藝文雑録」ではモンゴル語の「書籍の解題、書史、又は紹介」を試みている<sup>5</sup>。

日本における『元朝秘史』の本格的な研究は、1902（明治35）年に内藤湖南が文廷式から鈔本を贈られたことから始まる。内藤は紹介記事「蒙文元朝秘史」を書くとともに、その鈔本の写しを那珂通世に贈った<sup>6</sup>。那珂は1907（明治40）年に世界初の訳註といえる『成吉思汗實録』を刊行したが、惜しくも翌年に没した。石濱文庫には『元朝秘史』の精鈔本が遺されている<sup>7</sup>。石濱も内藤から鈔本の写しを贈られて、モンゴル語テキスト検討の側面から、那珂の研究の後を継ごうとしたのではないだろうか。

次に石濱が着手したのは、モンゴル語大蔵経「金字蒙古文蔵経」の研究であった。これも内藤が1902年と1905（明治38）年の「奉天」（瀋陽）での調査の際に「黄寺」（実勝寺）で存在を確認したものである<sup>8</sup>。その後、満洲文大蔵経とともに東京帝国大学に移されていた。石濱が東京帝大卒業生であることも研究に利したにちがいない。

石濱はこの研究のためにモンゴル語を本格的に学ぶことを決意したようである。1922（大正11）年4月に、新設の大阪外国語学校の蒙古語部に選科生として入学し、7月から9月にかけては、東京帝大の図書館で件の「金字蒙古文蔵経」を調査した。そのかわり東京外国語学校蒙古語部の教員ゴムボ＝パドマジャブについてモンゴル語を学んでいる<sup>9</sup>。また翌年には、『元朝秘史』に関わる研究も行っていった京都帝大の羽田亨が大阪外国語学校蒙古語部に出講し、その知遇も得ている。

ところが、1923（大正12）年9月1日の関東大震災で東京帝大の図書館とともに「金字蒙古文蔵経」が焼失したことで、石濱のこの調査・研究は頓挫する。内藤にとっても、石濱にとっても痛恨事であったにちがいない。同年11月8日付けの新聞に載った石濱へのインタビュー記事には次のようにある<sup>10</sup>。

<sup>5</sup> 「元朝秘史蒙文札記(一)(二)(三)」「蒙古藝文雑録(はしがき、い)、(一)」、『東洋研究』(東亜学術研究会) 6(6)、(7)、(8)、(9・10)、(11・12)、1916年。

<sup>6</sup> 小川環樹(責任編集)「年譜」『内藤湖南』中公バックス日本の名著 41、1984年。中見立夫「「元朝秘史」渡来のころ—日本における「東洋史学」の開始とヨーロッパ東洋学、清朝「辺疆史地学」との交差—」『東アジア文化交渉研究別冊』4、2009年、pp.15-17。

<sup>7</sup> 『石濱文庫目録』漢籍の部、史部・別史類では「用鈔本景印」とするが、2014年3月に調査したところ精鈔本であり、訂正すべきである。京大人文研蔵本(内藤湖南旧蔵)、筑波大図書館蔵本(那珂通世旧蔵)などと対照する必要がある。

<sup>8</sup> 内藤「焼失せる蒙満文蔵経」『内藤湖南全集』第七巻「読史叢録」、筑摩書房、1970年、pp.427-429。

<sup>9</sup> 注4の石濱著作目録・年譜。大阪外国語大学70年史編集委員会編『大阪外国語大学70年史』同刊行会、1992年、p.14。東京外国語大学史編纂委員会編『東京外国語大学史』東京外国語大学、1999年、p.1007。前掲の内藤「焼失せる蒙満文蔵経」(p.436)には、「文学士石濱純太郎君が嘗て東京大学図書館にて、かの金字経を繙閲せる際、其の跋語中に屢々林丹汗の時に書写せることを記せるを見たりといへば…」とある。

<sup>10</sup> 『関西日報年中無休刊』1923(大正12)年11月8日3面「赤門出の文学士さんが若い学生に交って蒙古語のお稽古」(石濱文庫所蔵。堤一昭「石濱純太郎を紹介する新聞記事2件(1923年、1927年)および解説」『石濱文庫の学際的研究—大阪の漢学から世界の東洋学へ—』平成23年度大阪大学文学研究科共同研究 研究成果報告書、2012年、p.17)。

「氏は最近支那文学に関する博士論文を起草中今度の震災のために東京に残した貴重な参考資料が全部烏有に帰し、研究に一大支障を生じたが、氏は更に屈せず論の筆を進めてゐるさうである」

「記者は直に、博士論文の事を聞くと、氏は迷惑さうに『そんな事は決してありません。まだまだこれからです、一生学究の徒であり度いと私は願つてゐます。蒙古語の研究も東洋史を徹底的に調べ度いと思ひまして無理に校長にお願ひして入学さして戴いたのです...』」

引用前半の記者の伝聞には混乱・誤りがあるように思われる。震災で焼失して研究に支障を生じた「東京に残した貴重な参考資料」は「金字蒙古文蔵経」を指しているのではない。後半の応答で「支那文学に関する博士論文」の起草も石濱は否定している。当時の彼がモンゴル語を学んで本格的な東洋史の研究へ進む決意をしていたことが分かる。結局、石濱はモンゴル語の大蔵経については4点の文章を残すにとどまった<sup>11</sup>。

内藤湖南は生涯の前半に雑誌・新聞の論説記者の経歴を持つこともあって、時事問題には強い関心を持ち続けた。先の1905年の「奉天」（瀋陽）調査も当時の小村寿太郎外相の紹介状を持つ外務省囑託としてのものであり、現地では旧知の児玉源太郎（総参謀長）と、福島安正（参謀）に会い、特に福島からは調査の便宜をはかってもらうなど、要人との人脈も有していた<sup>12</sup>。また内藤は新たな史資料の“発掘”・収集と、それによる研究分野開拓に意欲的であったこともよく知られている。

私費で内藤のヨーロッパ学術調査（1924（大正13）7月～1925年2月）に同行するほどの石濱が、それらの影響をまったく受けなかったとは考えがたい。石濱は内藤に傾倒する一方で、内藤が紹介のみに止まったか、または手を出しえなかった分野へと進もうしていたとのことである<sup>13</sup>。大阪外国語学校に入学した石濱が、『元朝秘史』や「金字蒙文蔵経」といった古典籍のみに関心をとどめていたとも考えがたい。

石濱文庫所蔵の『奉天蒙文報』は、1918年8月の創刊から1920年6月までの号がほぼそう。この新聞は南満州鉄道や日本の外務省の支援を受けて刊行された政策的な目的をもつもので、奉天（瀋陽）の実勝寺や、赤峰の日本領事経由で「東蒙一帯の配達機関」にも配達された<sup>14</sup>。1927（昭和2）年6月の石濱への新聞のインタビュー記事には「わが国で蒙古語の新聞を蒙古から全部取り寄せて読んでゐるのは、陸軍の参謀本部の外に、ひとり石濱

<sup>11</sup> 「金字蒙文蔵経金光明経の断簡に就いて」『支那学』4(3)、1927年；「京都帝国大学所蔵蒙文丹殊爾記」『桑原博士還暦記念東洋史論叢』1930年；「殿版蒙文大蔵経考」『大谷学報』11(3)、1930年；「蒙文陀羅尼集について」『支那学』8(1)、1935年。

<sup>12</sup> 前掲、内藤「焼失せる蒙満文蔵経」。三田村泰助『内藤湖南』中公新書、1972年、p.194。青江舜二郎『竜の星座－内藤湖南のアジア的生涯』中公文庫、1980年、Ⅲ大陸行。

<sup>13</sup> 藤枝晃「町人学者・石濱純太郎」『図書』234号、岩波書店、1969年2月、p.31。

<sup>14</sup> 注1①文献の内田孝「内モンゴル近現代文学研究からみた『フフ・トグ』紙」、pp.40-41。

氏を数えるのみであるといふ」とある<sup>15</sup>。刊行時期とはややずれるが、この文脈に最も合うモンゴル語の新聞は『奉天蒙文報』だろう。それ以外に『首都フレール新聞』（1910年代後半）、『朔方日報』（1920年）（どちらも石濱文庫に部分的に所蔵）も含めて言っている可能性もある。

上記の諸新聞が刊行された1918～1920年は、石濱と内藤との出会い（1916年7月）の後、『元朝秘史』をはじめモンゴル語典籍の研究を本格化した時期にあたる（大阪外国語学校入学前）。モンゴル語は初歩の独習に止まっていたらしい内藤は、モンゴル語の本格的な修得、モンゴル語典籍の研究、モンゴル語の新聞・雑誌の読破を石濱に託し、石濱もそれに応えたのではなかろうか。内藤の人脈は新聞・雑誌の入手に大いに役立ったに違いない。また石濱はそれに止まらず、さらに東北アジアの時事問題に関する諸語文献まで収集の幅を拡げていったのではなかろうか。石濱文庫のA.バラノフ『バルガ』（ハルビン、1912年）や『自由シベリア』誌（1926～1928年）、『ビロビジャンの星』紙（1937年分。未確認）も、内藤との出会いがきっかけとなった収集と考えられるのである。

1941～1945年刊の『フフ・トグ（青旗）』のほか、満洲国や蒙疆政権で刊行された新聞の収集<sup>16</sup>も、1916年以来の石濱の「モンゴル学事始」の一環として、入手方法を含めてあらためて考察する必要があるだろう。もっとも、著作目録のタイトルを見る限り、石濱には収集したモンゴル語新聞や東北アジアの時事問題について書いた著作はない。この点は内藤とは関心や研究の方向が異なると考えられる（未解読だった西夏文字研究に魅力により感じたのかもしれない）。彼自身は研究に使わなかったとしても、現在では入手しがたいモンゴル語新聞資料は「石濱文庫」として眼前にある。本ブックレットの『フフ・トグ（青旗）』をはじめ、現在の研究状況の中で彼の収集を活かしていくのは、われわれの責務である。

---

<sup>15</sup> 『東京日日新聞』1927（昭和2）年6月22日4面「学界新風景(19)東洋学の三人男 隠れた学者石濱氏」。注10に挙げた『石濱文庫の学際的研究』p.19。

<sup>16</sup> 注1①文献の内田孝「内モンゴル近現代文学研究からみた『フフ・トグ』紙」、pp.41-43。